自尊感情を高めるような運動部活動のあり方について

～運動部活動に関する意識調査より～

鹿児島県　　鹿児島県立鹿児島中央高等学校

瀬戸川　　拓

鹿児島県立国分高等学校

福　田　健　吾

１．調査目的と方法

（１）はじめに

近年，日本の高校生の自尊感情が，他の国々の生徒たちに比べ非常に低いことが指摘され，社会問題になっている。生徒達が抱える多くの問題を解決しようと，様々な方面で自尊感情を高めるための研究や努力がなされてきている。教育現場としては，自己有用感や自己肯定感などの自尊感情を高めるために，全ての教育活動を通じて取り組んでいくことが一般的である。しかし，その中でも運動部活動の教育的意義・目的が担う側面は非常に大きいものがあるように思う。

本県研究部では，運動部活動に参加している生徒とそうでない生徒とでは，自尊感情（自己有用感や自己肯定感など）において顕著な差が見受けられるだろうという仮説を立てた。仮説を検証するために，研究部員が所属する各高校で，予備アンケート調査を行った。その予備アンケート調査の結果は，仮説に反して有意な差は見られなかった。

私たちが期待する運動部活動の教育的意義・目的が生徒達にどのように影響しているのか疑問が残る結果となった。

（２）調査の目的

予備調査の結果を踏まえ，本県の運動部活動が日頃の活動で望ましい教育的意義・目的を達成しているかどうかを検証するため，「運動部活動での自尊感情」を中心に実態調査を行うことにした。さらに，生徒の意識と指導者の意識とを比較しながら，問題点（意識の差や意識のずれなど）を分析・検討することで，今後の運動部活動運営において自尊感情を高めるような指導の一助となることを目的とした。また，運動部活動内での人間関係や指導者との関係，勝利至上主義や能力主義などの運動部活動観についても調査し，望ましい運動部活動観を得られているかを確認することにした。

（３）調査の方法

①　実施期間

平成 21 年 9 月下旬～平成 21 年 11 月

②　調査対象者

ア　生徒については，無作為に抽出した県下 28 校の運動部活動に参加している生徒 3，233 名

イ　指導者については，無作為に抽出した県下 28 校の運動部活動を指導している指導者 400 名

③　調査内容

生徒及び指導者に対して，質問紙法による無記名アンケート調査（「運動部活動での自尊感情」と「運動部活動観」という大きく二つに分けた領域の計 30 の質問項目で，アンケート調査を行った。）を実施した。

（４）調査の構造（自尊感情と運動部活動観）

自尊感情（self-esteem）及びそれを測定する尺度としての因子の位置付けについては、先行研究(1)を用いた。その内容は次の通りである。

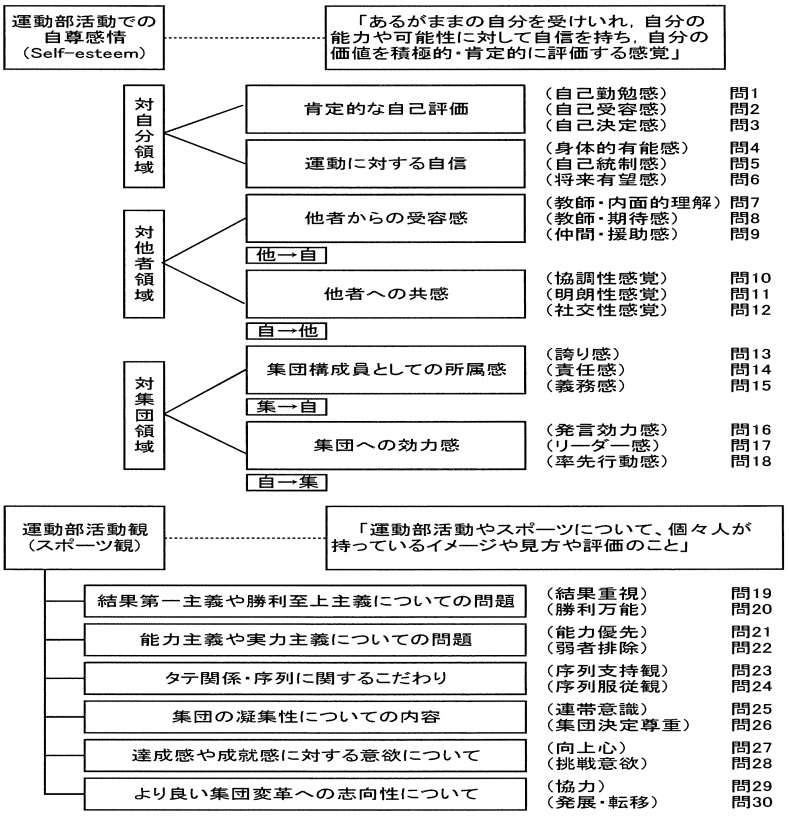
「運動部活動での自尊感情」としては「あるがままの自分を受けいれ，自分の（運動に関する）能力や可能性に対して自信をもち，自分の価値を積極的・肯定的に評価する感覚」とする。

自尊感情を「自分領域」「他者領域」「集団領域」の３領域から捉え、「対自分領域」については、自

己の捉え方に関する「肯定的な自己評価」と，運動とのかかわりに関する「運動に対する自信」という２要素で構成し,「対他者領域」については，他者から自分へと向かう「他者からの受容感」と，その逆方向となる「他者への共感」といった２要素で構成した。また,「対集団領域」については，集団から自分へと向かう「集団構成員としての所属感」，その逆方向の自分から集団に向かうところの「集団への効力感」といった２要素で構成している。

運動部活動における自尊感情を３領域で各２要素ずつ，計６要素で構成し、そしてそれぞれの要素について，図１に示すように各々３因子で探ることとした。

図1　調査の構造と要素



また、「運動部活動観」を「運動部活動やスポーツに対して，これまで個々の生徒が意識する，しないとにかかわらず，持っているイメージや見方，考え方，評価のこと」として位置づけ，６要素で構成し，それぞれ各２因子の計 12 因子によって探ることとした。

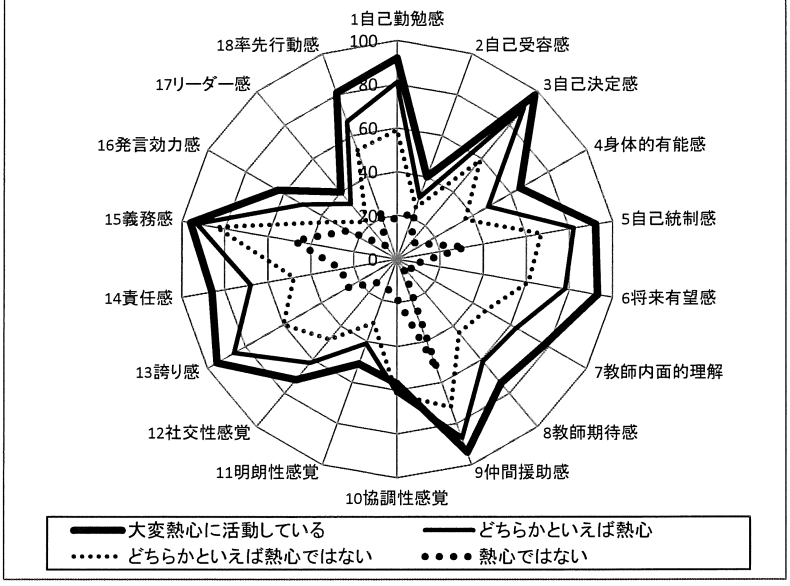
２．調査結果の実態

（１）活動状況別に見た自尊感情

アンケートに対する回答の「とてもそう思う」「まあそう思う」生徒の割合を，生徒の活動状況別にグラフに表した（図２）。全ての項目において活動状況が熱心な生徒ほど数値が高く，自尊感情も高い結果が得られた。領域別に見ると，「対自分領域」は，高い数値を示す項目が多いなか，「自己受容感」と「身体的有能感」が低い数値であった。

「対他者領域」は他者から自分に向かう「他者からの受容感」（問７，８，９）は高く，自分から他者に向かう「他

図2　生徒の活動状況別に見た自尊感情



者への共感」（問 10，11，12）は低い数値を示している。「対集団領域」も同じ傾向を示しており，集団から自分に向かう「集団構成員としての所属感」（問 13，14，15）は高く，自分から集団に向かう「集団への効力感」（問 16，17，18）は低い傾向を示している。

指導者も同様に「指導状況別に見た自尊感情」を各項目ごとに比較したところ，「自己受容感」をのぞく全ての項目で数値が高く，中でも「ほぼ毎日指導している」指導者の数値は高かった。

（2）生徒と指導者別に見た自尊感情

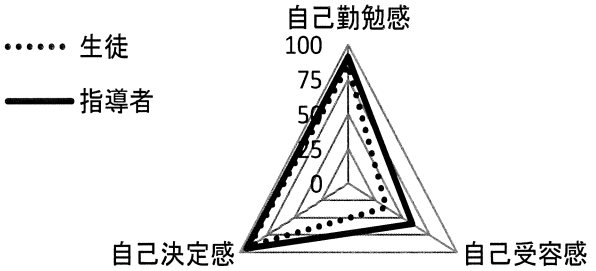
アンケートに対する回答の「とてもそう思う」「まあそう思う」生徒の割合と「意識している」「少し意識している」指導者の割合の比較をグラフに表した（図３）。

①「対自分領域」

～図 3-1　肯定的な自己評価～

自己勤勉感と自己決定感については，指導者は意識的に指導しており，生徒も自分に対する肯定的意見が自己勤勉感 85 %・自己決定感 91 %と高い数値を示した。一方自己受容感については，高めようと意識的に指導をしていると答えた指導者は 59 %であった。生徒においても 35 %と非常に低かった。

図3-1　肯定的な自己評価

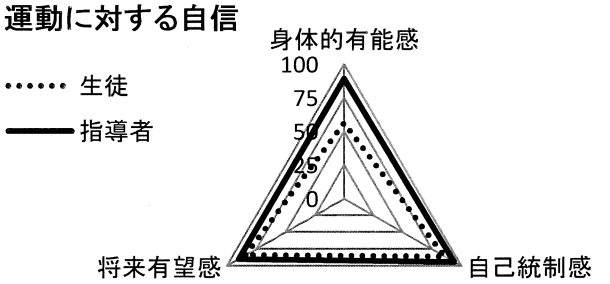


	1. 自己勤勉感	2. 自己受容感	3. 自己決定感
生　徒	85%	35%	91%
指導者	91%	59%	94%

～図 3-2　運動に対する自信～

身体的有能感については指導者の 89 %が意識的に指導をしていると答えたのに対し，生徒は 56 %であった。，生徒と指導者の意識には 33 ポイントの開きがあった。この項目は「まあそう思う」，「あまりそう思わない」といった中間回答が８割を示していた。自己統制感・将来有望感については，指導者・生徒ともに高い数値を示した。

図3-2　運動に対する自信



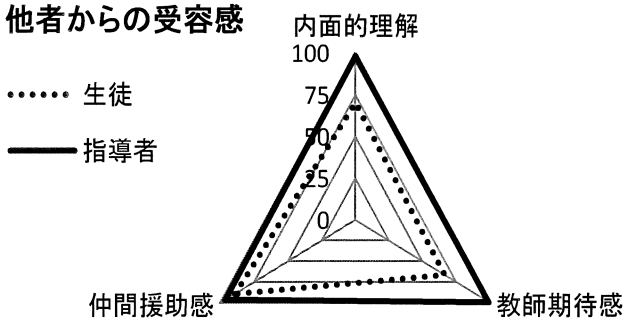
	4. 身体的有能感	5. 自己統制感	6. 将来有望感
生　徒	56%	86%	84%
指導者	89%	94%	90%

②「対他者領域」

～図 3-3　他者からの受容感～

教師内面的理解・教師期待感・仲間援助感については，指導者はいずれも高い数値を示した。一方生徒は，仲間援助感については 89 %であったが，教師内面的理解については 70 %，教師期待感については 66 %であった。指導者と比較してそれぞれ 28 ポイント・33

図3-3　他者からの受容感



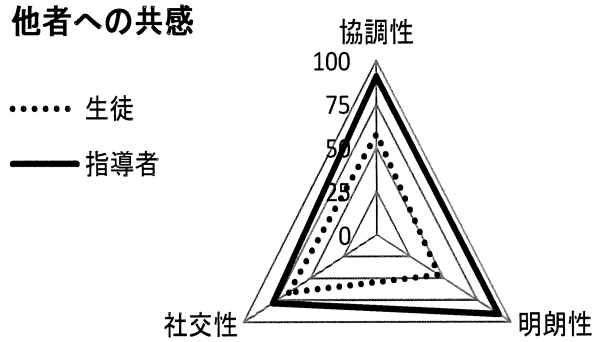
	7. 内面的理解	8. 教師期待感	9. 仲間援助感
生　徒	70%	66%	89%
指導者	98%	99%	96%

ポイントの開きがあり意識に差が見られた。

～図 3-4　他者への共感～

協調性感覚・明朗性感覚については，指導者はいずれも高い数値であるのに対して，生徒は協調性感覚 58 %，明朗性感覚 46 %と低い数値であった。指導者と比較して，協調性感覚は 33 ポイント，明朗性感覚は 45 ポイントもの開きがあった。社交性感覚については指導者が 78 %と他の項目よりやや低く，生徒は 66 %と他の項目よりやや高かった。

図3-4　他者への共感



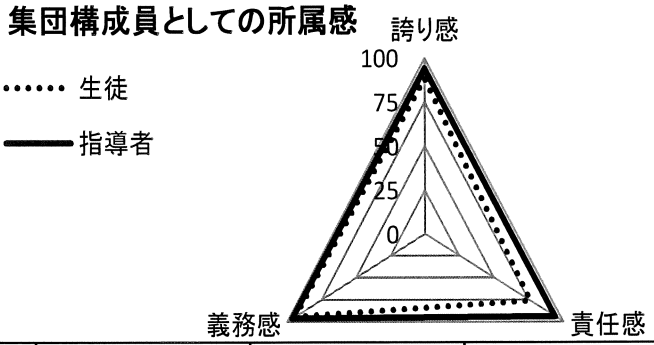
	10. 協調性	11. 明朗性	12. 社交性
生　徒	58%	46%	66%
指導者	91%	91%	78%

③「対集団領域」

～図 3-5　集団構成員としての所属感～

誇り感・責任感・義務感について，指導者・生徒ともにいずれも高い数値を示した。ただ，責任感については生徒が 76 %とやや低かった。

図3-5 集団構成員としての所属感

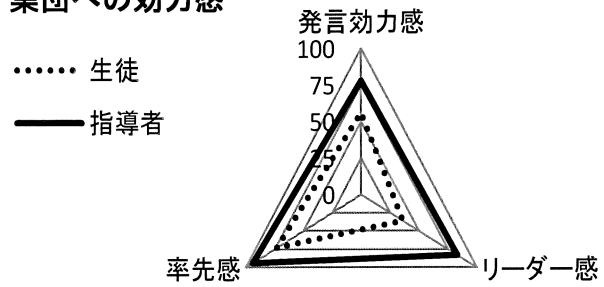


	13. 誇り感	14. 責任感	15. 義務感
生　徒	88%	76%	94%
指導者	94%	94%	96%

～図 3-6　集団への効力感～

発言効力感については指導者 78 %に対し生徒 56 %と 22 ポイントの差が見られた。リーダー感については指導者 83 %に対し生徒 36 %と 47 ポイントと大きな差が見られた。率先感については指導者 94 %に対し生徒 73 %と 21 ポイントの差が見られた。

図3-6　集団への効力感



	16. 発言効力感	17. リーダー感	18. 率先感
生　徒	56%	36%	73%
指導者	78%	83%	94%

（３）生徒と指導者別に見た運動部活動観について

①　部活動問題に関わる意識について

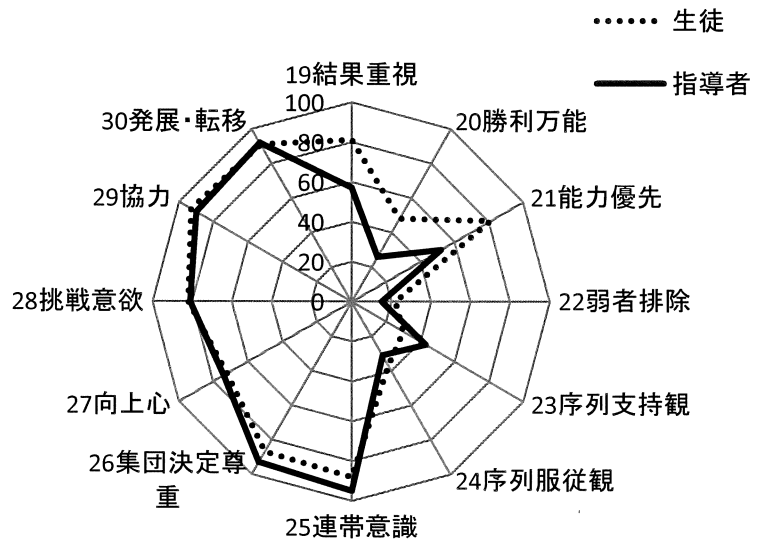
結果重視については指導者 57 %，生徒 81 %と生徒の方が 24 ポイント高かった。勝利万能については指導者 26 %，生徒 48 %と生徒の方が 18 ポイント高かった。能力優先については指導者 52 %，生徒 81 %と生徒の方が 29 ポイント高かった。弱者排除については指導者 15 %，生徒 22 %と生徒の方が 7 ポイント高かった。序列支持観については指導者 43 %，生徒 30 %と指導者の方が 13 ポイン

ト高かった。序列服従観については指導者 31 %，生徒 37 %と生徒が 6 ポイント上回っていた。

② その他の運動部活動観について

指導者・生徒ともに 7 割から 9 割の高い数値であった。

図4 運動部活動観



3．考察

（1） ～生徒の活動状況別に見た自尊感情より～

① 熱心に活動している生徒ほど自尊感情が高いという結果が得られた。自尊感情を高めるためには，積極的に運動部活動に参加し，熱心に取り組ませることが重要である。

② 自分が好きであるとか，信頼できるといった感覚の「自己受容感」と自己の運動能力・運動技能に対する肯定的な認知感覚としての「身体的有能感」が低い結果が得られた。このことは，自分に対する自信のなさが一因と考えられる。

③ 対他者領域の自分から他者への共感の因子である，他者と協調しようとする「協調性感覚」，明るく和やかな雰囲気で接する感覚としての「明朗性感覚」，他者と積極的に関わろうとする感覚としての「社交性感覚」の数値が低くまた，対集団領域の自分から集団への効力感の因子である，自分の主張が受け入れられる感覚としての「発言効力感」，自分の言動が周囲に影響する感覚としての「リーダー感」の数値が低かった。これらのことから，自分から他者へ働きかけることによって得られる自尊感情の獲得が苦手である生徒が多いことが分かった。そこにも，自分に対する自信のなさが相手との関わりを弱めていると思われる。

（2） ～生徒と指導者別に見た自尊感情より～

① 肯定的な自己評価のなかでも「自己受容感」の低さは顕著であった。指導者側の意識も他と比べて一番低い結果であった。運動部活動においては，身体活動の結果として，記録や勝敗で生徒の能力が明確に表されている。自分を客観的に受け止めた結果，自信のなさが数値として現れたのではないかと思われる。

② 運動に対する自信のなかでも自己の運動能力，運動技能に対する肯定的な認知感覚としての「身体的有能感」は生徒の数値が低かった。運動レベルの低い生徒にとっては，自分を肯定的に受け止めにくいのではないかと思われる。指導者の意識の高さに比べて生徒の意識が低い現状を踏まえると，指導者が生徒のレベルにあった個々の目標を設定し取り組ませることで，生徒個人の「身体的有能感」がさらに高まり，運動に対する自信から得られる自尊感情の獲得にも期待が持てるのではないかと考える。

③　他者からの受容感では，同じ他者でも指導者に認められている実感はチームメイトに認められている実感に比べて低い数値を示している。日頃のコミュニケーションの差がそのまま数値に表れているものと思われる。それでも前述の「自己受容感」と「身体的有能感」の低さに比べて，指導者からの内面的理解と期待感が７割と高いことを考えると，自信が持てない生徒達に対して指導者の理解や期待が上手く伝えられていると考えられる。

④　他者への共感では「協調性感覚」と「明朗性感覚」が５割程度，「社交性感覚」が６割程度と低い数値を示したが，日本人の引っ込み思案な性格や本人の自信のなさが背景にあるのではないかと思われる。

⑤　集団構成員としての所属観と集団への効力感を比べると，所属していることに名誉を感じるといった「誇り感」と自分の行動が集団の評価につながるといった感覚としての「責任感」，規範意識につながる感覚としての「義務感」が高い。生徒は集団に所属し活動していることで得られる高い充実感を持ち，そのことが自尊感情を高めることにつながるものと考えられる。それに比べて，自分の主張が受け入れられる感覚としての「発言効力感」，自分の言動が周囲に影響する感覚としての「リーダー感」が低い。一つには部活動という集団の中で，活動の中ではリーダー的な役割としてキャプテンが位置づけられており，「発言効力感」や「リーダー感」を得られにくい状況にあるのではないかと思われる。

（３）　～生徒と指導者別に見た運動部活動観より～

負の要素として捉えられる６項目（19 結果重視～ 24 序列服従観）については，指導者は低い結果が得られたが，生徒は「結果重視」「勝利万能」「能力優先」は指導者より約 20 ポイント高い数値だった。このことは，指導者が意識しているにもかかわらず，生徒は「結果重視」「能力重視」に流れていることが伺え，本来の運動部活動の意義･目的が生徒に十分伝わっていないことが考えられる。

４．まとめ

（１）生徒達は運動部活動を熱心にやった方が，自尊感情が高まり，運動部活動の教育的意義･目的が得られやすい。

（２）運動能力や運動技能の低い生徒を視野に入れた段階別の指導を心がけることが，生徒達に自信を持たせ自尊感情を高めることに役立つと思われる。

（３）生徒達は，自分から他者に向かう，あるいは自分から集団に向かうところの自尊感情が低いので，指導者はその点を意識して指導することが望まれる。特に，運動部活動の枠を超えて学校生活や社会生活を視野に入れた「リーダー感」や「発言効力感」を指導者が意識して指導することで，さらに生徒達の自尊感情は高まると思われる。

（４）本県の実態としては全体的に望ましい運動部活動観が得られていたが，「結果重視」「勝利万能」「能力優先」の項目において，生徒達の意識の中に運動部活動問題としての負の要素が伺えた。今後，指導者はその点を意識して指導することによって，さらに望ましい運動部活動が実践されることが期待される。

最後に，本研究によって運動部活動と自尊感情の関わりが大きいことが明らかになった。今後，本研究で得られた成果を元に本県の運動部活動が活性化し，更なる発展の一助となれば幸いである。

注１　井上　勉（中学校における「心の健康」を育む運動部活動の在り方　～自尊感情を高め，自己実現を支援する運動部活動モデル～）2004 年 3 月